最近の井伏鱒二

―放下と固執について―

槙林滉二

最近の井伏鱒二を語るに、二つの面を考えざるを得ない。一つは、流石の井伏氏も老いたりという感であり、今一つは、井伏氏まだまだいかにも若いという感である。背反する二つをしかし、併置せざるを得ない。

老いたりと思わせる要因は二つに分かれる。一つは、井伏が終生の総括にかかっているという感がしきりにすることである。ここ十年間の仕事を俯瞰すると、いわゆる作家としての苦闘期、井伏流にいえば「文学青年要れ」の時代（「文学青年要れ――『あの日この日』の周辺事――」〈対談井伏鱒二・尾崎一雄〉昭49・1『群像』、「豊多摩郡井荻村」昭56・2～）の総決算と、第二次大戦中の苦辱の時期、いわば「徴用中の時代」の総括にかかっているので、これら二時代の点綴に事は絞られている感がしきりにする。そして、おそらく、この二つの時期を中心に井伏の生涯も遠望できる。眼を後に向けたこれらの回想記群は、少しく老いたりと言える一面を持つと言えようか。老いたりの二つめは、その回想に繰り返しの多いことである。少部の脚色の変化を伴いつつ同じ挿話が極度に繰り返されている。もっとも、総括の意ならそれ以前に描き出されたものをすべて投入するものとして認容できようし、事実そうでもあろう。しかし、同じ回想記内における繰り返しは、やゝ冗漫に堕す。

老いたりと今述べた。しかし、決して老いてない、いやますます壮んであるという一面を、常人以上の精神と暢達のあとを最近の井伏に見ざるを得ないこともあわせて記しておきたい。それは、異常な筆力と構想力の存在をも意味する。井伏は好きな釣も年とって「隠居釣」になった（「ヤマメ釣」昭44・10、「失われゆく釣人たちの自然」〈対談井伏鱒二・檜山義夫〉昭45・2『潮』）と嘆ずるが、執筆においてはすさまじい現役である。表面上、いかにも「隠居」仕事めいて、随筆集『釣人』（昭45・6、新潮社）、『早稲田の森』（昭46・9、新潮社）、『人と人影』（昭47・5、毎日新聞社）、『小黒坂の猪』（昭49・7、筑摩書房）、『スガレ追ひ』（昭52・3、筑摩書房）を発表、ゆうゆうと生活を楽しみ、酸いも甘いも知り尽して、興の向くままに自在に書いているのが最近の井伏であるなどと整理しようものなら、実はひどいしっぺがえしをくわされる可能性がある。『海』に連載された『新倉掘貫』は昭和五十一年一月から五十二年一月まで十一回（五十一年八月九月休）にわたり延々と続けられ、その最後は「第一篇終」となっている。一方、『新潮』に続いた「徴用中のこと」も、昭和五十二年九月から五十五年一月まで二十九回続き、これまた「前篇終」と結ばれる。そして、「豊多摩郡井荻村」は昭和五十六年二月から『新潮』に連載され始め、九月で第八回になるが、まだ、いつ果てるか予測もつかない。これも十数回続き、また「第一部終」などということになるとしたら、それらの第二篇、後篇、第二部などが書きあげられるのは、その構想のみで、十数年を必要とする。若い、すざまじい現役であるとする所以である。

ところで、井伏は小説と随筆との区別を「うそ」を書くか書かないかで区別している（「文学・閑話休題」〈対談井伏鱒二・永井龍男〉昭47・1『文芸』、「現代文学とことば・2、井伏鱒二」〈インタビュアー・中村明〉昭51・2『言語生活』）。井伏に言わせれば、随筆で実の世界を小説で虚の世界を描いてきたらしい。ここ十年、井伏はその二足の草鞋を上手にはきこなしてきている感がする。そして興味深いのは、実の世界の苦々しさを虚の世界、つまり創作により浄化してゆくのが一般と思われるのに、井伏は逆に、虚の世界の辛さを実の世界たる随筆で補っている感がすることである。「明暗」を記してゆく苦渋を漢詩を作ることで癒した夏目漱石に擬すわけではないが、井伏の精神のバランスはそこいらで整えられている気配がある。しかし、事はそれほど単純でもない。

少し中へ入ってみよう。まず、随筆の世界はどうであろうか。この十年間に描き出された随筆群を私は二つに大別したい。一つは、往事の回想を中心にした随筆群であり、今一つは、釣を含む身辺些事を記したものである。先に私が井伏老いたりの感を抱かせるといったのが前者にあたる。往時の回想が文学青年要れ時代と徴用時代を中心にしたものであることは前述した。この二つに主たる視点

が置かれ、記述は時を前後してゆく。対して後者は、いわば井伏特有の絶妙のエッセイ群である。釣に関するもの、小動物に関するもの、身辺の小さな出来事、読んでゆくと、井伏が実にのびやかに生活を楽しんでいる感がする。一種の達人の境で描き出されたものである。

昭和四十五年十一月から十二月にかけて、「半生記」を井伏は『日本経済新聞』に連載する。出生に始まり、福山中学、早稲田大学時代、関東大震災の頃、陸軍徴用時代まで、鮮かに年立てを用いて描き出している。かつての名自叙伝『雞肋集』（昭11・5～11）を拡大詳記したもので、戦中までの井伏の家庭環境、交友、作家として世に出るまでの閲歴などがほぼ明確に諒知されるものである。井伏の半生記はこれで尽きたかに見えた。

ところが、昭和五十二年から、前記のように、「徴用中のこと」を、二十九回にわたり奔流のように記してゆく。徴用時代に経験した物事の、徹底した再現であり増幅である。徴用で過した日々を、眼前の小事から、歴史を動かした大局の戦線、果てには政治の大流まで多角度に視界を据え描き出そうとしている。ために参考文献、聞き書きなどを各種、事に当り、場に応じて使用、太平洋戦争開戦からシンガポール陥落までが、さながら、一巻の戦場絵巻のごとく描き出されている。そして注意すべきは、井伏がそれまでに記した徴用に関する記録類のほとんどすべてがそこに投入されているということである。生涯の総括にかかっているというのはこのことをさす。ために、「半生記」やそれ以前に書かれた様々のこの時代の思い出は、重複に重複を重ね使われる。かつての日記「南航大概記」（昭18・12）を中心に、六人の報道小隊の記録を主に記した「ゲマスからクルーアンへ」（昭18・1）、徴用令の電報のことを記す「旅館・兵舎」（昭18・2）、オランダ系ユーラシアンの十四歳の少女の日記「或る少女の戦時日記」（昭18・3）、輸送指揮官を記した「私の万年筆」（昭23・12）、ジョホール水道での投網を記した「懐中電燈」（昭24・4）や「釣魚雑記」（昭25・3）、チャパカの花の「にほひ」（昭36・2）、中村地平の思い出「南方ぼけの頃」（昭38・6）、そして、山下奉文将軍に礼儀知らずと叱られた屈辱の体験「悪夢」（昭22・12）、「戦死・戦病死」（昭38・4）などなど、ほとんど同じ挿話が、時には断わって、時には臆面もなく繰り返されている。もし、これまでの総括であるということを除いて読むなら、重複するこれらはいかにも不用意であり、場合によっては不謹慎にさえ思われる。この作品は、全二十九回で、前記のように「前篇終」となっているのである。

そして、今一つの総括にかかっているのが、現在『新潮』連載中の「豊多摩郡井荻村」（昭56・2～）である。井荻村に家を建てた時代を中心に、これも、かつて記した様々のこの時代の記録の総括にかかっていると言えようか。「半生記」と重なる部分が多いが、内容はひどく稠密詳細になっている。関東大震災の頃、『文芸都市』同人の時代、阿佐ケ谷将棋会のことなど。町史、区史から、郷土史家、はてには蔦の長老や町の古老などからの聞き書きまであらゆる手段を講じ、昭和初年代の荻窪近郊の様相を浮かび上がらせようと試みている。それは、大岡昇平の「幼年」（昭46・1～47・11）以降の一連の作品群を思い出させる。大岡のそれは「わが生涯を紀行する」の題のもとに、渋谷駅周辺を徹底して再現しようとしたものであるが、それと同質の試みがある。昔の店、横丁、住人、行事など、できうるかぎりの再現の試みである。

「半生記」「徴用中のこと」「豊多摩郡井荻村」ら一連の総括ものは、かくて最近の井伏の随筆群中、一高嶺をなしている。しかし、「徴用中のこと」の後篇、そして「豊多摩郡井荻村」の完成をまっても、まだ、井伏の半生でしかない。その後の、戦後三十年はほとんど手つかずである。これらの総括がもし考えられているなら、まだ〳〵長い苦しい仕事が続くはずであろう。

こういった総括を行いつつ、一方では、他の時期もそうであったように、この期も、実に自在に伸びやかに、いわゆる井伏的な随筆群が展開されている。私は、その自在さを「放下」の世界とでも名づけたい。「山椒魚」（昭3・5）以来続いた暗い井伏は、つねにこの自在な随筆群で自己を救っているが、この期も同質のことが言えそうである。これらの随筆群を私は、三種に分けてみたい。一つはものはづくし的なものである。二つは身辺些事の記録、三つめは骨董、魚釣りといった趣味にまつわるものである。試みにその多彩を記してみよう。

うばめ樫の生垣について記した生垣づくし（「うばめ樫」昭42・6）、大きな木づくし（「大きな木」昭43・1）、様々な人間の風貌を描いた人づくし（「風貌姿勢」昭44・4）羽織を着ての坐り方づくし（「羽織」昭45・1）、様々な釣宿の思い出を綴った釣宿づくし（「釣宿」昭45・4～6）、島の声づくし（「鳥の声」昭45・5）、鳥づくし（「四十雀」昭45・11）、自動車の騒音づくし（「窓の外の自動車」昭46・2）、炬燵づくし（「炬燵」〈昭48・1〉、「炬燵の話」〈昭51・1〉）、身辺の雑器づくし（「雑器」昭48・3）、魚のハゼづくし（「ハゼ類の魚」昭48・4）、自己を放下し、様々なものを興の向くままに、実にのびやかに辞書を繰り、図鑑を調べ、歳時記を捲り、人に聞き、放埒に楽しんでい

るのである。虹づくし（「虹のいろいろ」昭49・1）、様々な人に間違われた人違いづくし（「人違ひ」昭49・2）、地蜂（スガレ）を飼おうと様々に聞き調べるスガレづくし（「スガレ追ひ」昭49・10〜50・4）、蟻地獄の様々（「蟻地獄」昭49・12）、放流した鮎づくし（「湖水の鮎」昭50・1）、渡し舟の経験づくし（「渡し舟」昭51・11）、盤を使わない将棋づくし（「盤無し将棋」昭52・1）などなど、挙げてゆけば、いかに井伏が様々の物に関心を持ち、興の趣くままに追い求め、生活を楽しんでいるかがわかる。もはや生活の達人と言ってよい。自己放下の世界である。

第二の身辺ものは、人事や実生活のできごとを主としたもので、多く居住した土地にかかわってくる。冬の気管支喘息、夏の「カユイカユイ病」を治すため信州高森に古い家を買い取った、その別荘にまつわる風物人事を記した、いわば高森ものとでもいえる「馬」（昭47・4）、「病気」（昭47・12）、「流星騒ぎ」（昭48・1）、「小黒坂の猪」（昭49・3）など、冬の寒さを避けるため備前の牛窓に転地し、そこで出あった風物を記した、いわば牛窓ものとでもいえる「備前牛窓」（昭50・6）、「問合はせの手紙二通」（昭51・1）など、それらの作品は、土地の人事や風物描写がそのまま住人たちの喜怒哀楽とからまって描き出され、各々が鮮かな人生絵巻になっている。かつての「多甚古村」（昭14・7）や「本日休診」（昭24・8〜25・3）などに類する世界である。日常生活の合間に想記する故郷の人事風物を記した、いわば故郷もの「川底の町」（昭45・2）、「村のムクの木」（昭48・2）、「天井裏の隠匿物」（昭48・6）、「姫谷匣鉢蓋」（昭49・3）、「HYOTAN」（昭54・2）、そして、自己身辺の些事の記述を主とした身辺もの「七月の日記」（昭42・8）「庄野君と古備前」（昭48・6）、「九月十二日記」（昭48・10）、「開高夫人からの聞書き」（昭49・1）、「開高健」（昭50・12）「角川源義句集」（昭51・2）、「牧野伸一の文学碑」（昭51・3）などもある。ここでも、やはり生活の達人ぶりが鮮かに見て取れる。土地や人間に対して筆者のもつ細やかな愛情が惻々と伝わってくるのである。

第三の趣味に関するもの、とくに魚釣りは、屈曲を重ねた井伏の人生における放下の重要事として筆頭にあげるべきものだったかもしれない。そもそも釣に凝り始めた動機を井伏は次のように記している。

「この年、東条陸相の『戦陣訓』を通達、松岡外相、ソ聯経由でドイツ、イタリア訪問に出発、ゾルゲ事件があつた。いつ戦争になるのかと、びくびくさせられる日が続いてゐた。私は将棋と釣に凝るやうになつて、まじめに原稿を書くやうなことはなくなつた。釣場へ行つて糸を垂らすと、不思議に原稿のことなんか気にならなくなつた。釣の師匠の佐藤垢石が『童心宿竿頭』といふ美辞麗句を教へてくれた。」（「豊多摩郡井荻村」）

昭和十六年頃の思い出である。ひたすらに「童心」に帰り、様々の自己の外的内的苦悩から解放されようとした姿勢がある。こう続けている。

「将棋も釣も自分は好きで仕様がないほど好きになつてゐたが、どういふものかちつとも技術が上達しなかつた。上達したいとも思はなかつた。それがまた自分を安心させる役に立つてゐると思ふやうになつてゐた。」（傍点筆者、以下同）

一種の平衡感覚保持の機能である。釣をする人は短気の人が多いという、意識の混濁をこの童心純化により解消しようとしているのである。「飯田竜太の釣」（昭43・1）、「宇野さんの魚釣」（昭43・11）、「風月翁」（昭44・4）といった、人々の魚釣りの様子、そして自らの近頃の釣を「隠居釣」と称す「ヤマメ釣」（昭44・10）、釣にかかわる様々の思い出や哀歓を記した「釣宿」（昭45・4〜6）、様々の釣の達人たち「川で会った人たち」（昭49・1）、自己放下、自己救済として、この世界はもはや、井伏の一種の生活感覚、皮膚の一部にまでなっている感がある。そこには、『川釣り』（昭27・6）、岩波新書）や『釣師・釣場』（昭35・2、新潮社）などに収められたものとも違う、もっと枯れた世界が現われている。ひたむきに釣に自己の解放を求めた、いわば強制的な自己放下から、無理しないで思いのままに釣る自然な自己放下へ。

放下しつつも、自己の総括を志していた最近の井伏の随筆活動にくらべ、創作の方はどうであろうか。井伏のいう「うそ」の世界に彼は何を托しているのか。気づかされるのは、かつての、「二つの話」（昭21・4）、「侘助」（昭21・5〜6）、「遥拝隊長」（昭25・2）そして「黒い雨」（昭40・1〜41・9）などにみられた、個の自由や幸せを圧殺してゆく体制に対する、屈折した抵抗の姿勢が、強靱に持続されているということである。秀れた才能やあえかな幸せへの願いを、権力や大きな時の流れが非情に蹂躙していった、しかし、にもかかわらず、その中で、自己の願いや夢、願望を棄てきれず、それに激しく固執し、自己の生を貫こうとしていった人達を、井伏はきびしくそして暖かく見据えている。かけがえのない生が抑圧されたあとでも、やはり、生きる価値を何かに見つけようとして必死に生きた人達、いわば、固執の人達に対する井伏の眼はひどく執拗でやさしい。

鳥人幸吉の影響下、同じく空を飛ぼうとして捕まり入牢させられた表具師朔次郎の半生を描いた「御用控帳」(昭42・1)などはその典型的なものである。越後で拾われ、その拾い親からまた備後小島に棄てられ、小島で苦労して働き、新田開発をして小康を得るも凶作にあい夜逃げをする。岡山に出て表具師の徒弟となり、親方の代りさえする腕になりながらも、鳥人幸吉の事件に連座、所払いで小島に帰り、表具師、入歯師、さらには鹿の皮なめし師として地道に働く。今度こそ落着くかと見えた時、「空飛ぶからくり」の製造を志して捕えられる。鳥人幸吉の行いを「鳥虫の卑しき様を真似るもの」として罰した前例に習い、役人たちはあたら一つの可能性を無惨に潰してゆくのである。小島の代官は、諸式を大藩あるいは江戸の判例にあわすため、岡山藩で叩払いを経験した幸吉に、叩きに使う縄の太さ、叩きかた、かけ声のあげ方など万端「大藩の風儀」を習おうとする。「佳助」の再現である。そして、その戯画化はひどく物悲しい。井伏は、老いて入牢する朔次郎について次のように評して結んでいる。

「残り少い命だからこそ赦免にしてもらいたいと嘆願の声を出したくなる。せっかく歯抜き屋として落着いていたように見えるのに、巡りあわせのよくない人であった。」

外圧により、「巡りあわせ」により、才を伸ばし切れなかった男に対する嘆嘆の声である。

体制の中での個の運命追尾は、「一握の籾」(昭47・3)にも見られる。天保七年、甲州百姓一揆に知らぬうちに捲き込まれた千代松は、奉公先の豪農利八の家が襲われそうになることを知り、利八方の熊蜂の巣を石で壊し、一揆の侵入を防ぐ。打壊しを免れた利八方ではこの時の籾米を一俵、代々保存しておいた、その天保の凶作に収穫された籾を一握り、偶然手に入れた主人公は、様々の感慨にふけるのである。窓にかける窓運上、柿にかける柿運上、苛斂をきわめる政治と凶作の中で生きた人々の哀しみを「一握の籾」に托したこの作品も、権力への抵抗の一つの叫びといえよう。

第二次大戦という未曽有の動乱の中で狂っていった種々の人生を描き出した作品群もこの一連のもので、個を描いて、その背後にある機構の大きさと非情さとを記そうとしたものである。大戦中、シンガポールのジョホール州司政官をしていた内船さんの話を書いた「質流れの島」(昭49・1)はその一端に連なる。学生時代、下宿を同じくしていた内船さんとジョホール州で再会、甲斐源氏の流れを自称する内船さんとケロンで釣を楽しむ。戦後しばらくして、年賀状を取り交わすようになり、近年は年一度、敬老の日にほんのちょっとだけ話をする仲である。その内船さんが会うたびに話すのが、瀬戸内海にあるという質流れの島についてであった。徴用中、ふと話したそれを、内船さんは、昨年、一昨年前のことに思いこんでいる。かつて夢みた内海の楽園を、四十年の後もまだ執拗に追いつづけている、いや、老いて人生から落ちてゆけばゆくほど、内船さんの夢は現前化してくるのである。当時、二十七円という価の島について、語りかけては帰ってゆく内船さんの姿を、主人公は哀しい眼で見つめている。「肇さんのこと」(昭50・1)は、戦い告発の姿勢がより顕わになる。近所に住んでいた埴生肇さんの父武兵衛さんは、日露戦争で片足なくした退役軍人であり、肇さんは、警察学校を出たあと、巡査になり、時をえて、ビルマの司政官を志願、相当な官位まで進んだらしいが、何か「行きすぎ」があったらしく、戦後、進駐軍に追われ、田舎廻りの劇団の女形や坑夫などをして逃げまわる。戦犯解除のあと、尋ねてくるが人が変わっている。肇さんはその後、「用事もない」のに奇妙な内容の電話を何度かかけてくる。高松塚発見の時、あれは中国系だとか、馬王堆の漢墓発掘の時、その女性は虞美人だと述べ、電話に出た主人公の姉に、垓下の戦の一節を朗誦してみせ。総社美術館が盗難にあった時、その犯人像を予測した電話をしてくる。戦争で一生を狂わせた、どこかいびつになった男の姿に、井伏は珍らしく身をのりだして悼みの声をあげている。「肇さんはビルマとの関係で一生を台なしにしたと云ってもいい」、「埴生家の戸主は、武兵衛・肇と二代つづいて戦争で揉みくしゃにされた。気の毒だと云はなくてはならぬ。戦争は嫌やだ。」、「戦争さへなければよかつた。」繰り返されるこういう叫びは、痛切なトーンとして作品の基底に流れている。肇さんの願い続けたものは、文化に対する知的共感への願いであり、それに代表される知的文化的な市民生活の確保であったかもしれない。

大作「新倉掘貫」とて同質の世界である。甲州谷村藩は河口湖の水を新倉村まで掘貫する大工事を始める。藩主秋元但馬守喬知は奏者番をへて今や若年寄になり、老中をもねらう位置にある。その政治資金のために領民は九公一民の苛酷な生活を強いられている。城代家老高山伝右衛門は俳号を麋塒といい江戸から俳諧師松尾芭蕉、芳賀一晶を招いて領内を吟行する。その芭蕉と、前年百姓一揆を起し代表として処刑された百姓六人の供養地蔵とがまず鮮かに対比して描かれる。幼くして両親を失い、藩士でありながら足軽の家に育てられ、今は高山家老の「佑筆方」を勤める軍平がこの作品の引き廻し役である。肝心の新倉掘貫はさておかれ、話は工事に到るまでの経過が多彩に時には放恣に展開される。馬子の姿をし

て芭蕉の案内役を勤めさせられた軍平は、次いで、配流されてきた浅井三卓という老人の監視役を命ぜられる。三卓はもと佐倉の藩医であった、貞享元年江戸城中で大老堀田正俊が従兄弟の稲葉石見守に刺殺された事件を噂して捕えられ大島に流され、更に谷村藩に預けられた人物である。高山城代は三卓、軍平に命じ、富士山噴火の事歴を調べさせ、あわせて富士の実体を探るべく、規矩術師西沢与大夫を招く。西沢は榎本其角の弟子で俳号を雑司谷人という。ところが、規矩術師が来たと言うだけで検地の下見の噂がたち、一揆の兆しが諸方に現われる。生活の厳しさはこういう末部から類推される。西沢は江戸へ帰り、代って、岩石や金鉱石に詳しい佐野有益軒という老人が来る。俗名左内、俳諧は二十年間に一句だけ作ったことがある。元御家人の次男で、算学塾で錬金術を習い、黒川金山、甲州の山々で灰吹精錬師として働き、四十九歳で結婚、今は江戸で余生を楽しんでいた。三卓、有益軒、軍平などが、家老の命で富士山の調査、富士講の御師のいる相模国須走の調査、新しく炭焼きを道志で行わせようと入ってきた江戸越後屋の事業の実態調査などを次々に行ってゆくのが、この作品の基本骨格である。軍平、三卓、有益軒といった、運命に流されながらも、その中で懸命に生きてゆく人々を、井伏は克明に書き込んでゆく。苛酷な重税の中で一揆にすべてをかけようとする農民の姿、その動きを知りながら、一度拡大した生活の枠がしぼれぬ藩主を含む上層の武士達、堀田刺殺事件の混乱の中で中絶したが、谷村の城の移転さえ上層部は考えたりしていた。体制と個とが対立する世界を客観的に描くうちに、時に井伏の筆は大きく農民側へゆれる。富士見西行と洒落る芭蕉達を否定はしないが、しかし、その秀麗な富士さえ、いや富士が農民達にとっては、自然の運行を妨げる、邪魔で怪異な存在でしかないことをも描き出す。「むつくりでつかく邪魔つけになるだけ」、「百姓たちは『富士をぶつ倒せえ』と云ってゐる。」大きな権力機構、そして時として自然界をも含む非情な世界全体の運行の中で、流され、潰され、そしてそれでも生きてゆく人々の姿が、あくことなく綴られている。

繰り返しになるが、その大きな外圧の中で、何かにこだわり、そしてそのこだわりを一つの生き甲斐として日々を過していった人々の悲喜の世界が最近の井伏の追い続けた作品の基調トーンになる。そしてそれは、ただに井伏最近の仕事だけではなかったかもしれない。

ところで、このこだわり、それは小事であろうと大事であろうと、何かに固執してゆく生活や姿勢が、実は井伏自身の問題であったかもしれない。随筆とも創作とも弁別しがたい作品群の中に、それらは鮮明に見い出される。「うなぎ」(昭46・11)という作品がある。早稲田の同窓会が五十年ぶりに熱海であるときき、ついでに熱海にいる岡谷君に会おうと決心した主人公が、岡谷君の好きであったうなぎを生きたままお土産に持参しようと手配する。岡谷君は、微用でシンガポールにいた時、自分の娘が実は養女であるという秘密を主人公に話している。苦労して持っていったうなぎを馴染みの宿に預け、同窓会場に行き、宴半ば、岡谷君の家に電話するとその奥さんの返事がはっきりしない、果てには外で会うように手配されている。酔って娘が養女であることを話されるのを恐れている気配がある。一方、宿に電話すると、苦労して持っていったうなぎはすべて死んでいた。寂莫たる感のまま、岡谷君に会うのを止して帰るという筋である。うなぎと養女の件に妙にこだわる姿が印象的である。よりこだわりの激しいのは、「船津村の窯址」(昭47・10)である。昭和十一年頃、河口湖畔、船津村に弥生式土器の窯址があるときき河口湖畔に出かけてゆくが、すでに埋められていて、見ることができなかった。のち青柳瑞穂を誘い、太宰治などと再び行こうとして果せないまま、今日に到る。四十年前の話だが、今でもその果せなかった夢を追っているという作品である。より凄まじいのは、この夢、すなわち船津村の窯址の掘出しを、「新倉掘貫」第四章と五章の中で、江戸時代に行わせていることである。現実の夢を創作の中で果たしているのである、異常な執念といえようか。「兼行寺の池」(昭53・1～5)は、柏崎の南、鼎村の兼行寺というお寺で、野鴨を飼っているときき、わざわざ越後まで見にゆく話である。話は偶然に出あった戦死者の三十三回忌の念仏(法事)のさまを詳細に記してゆくことで変化のあやはつけられているが、たった一羽の、人に飼われた鴨を見るために行うこの道行は、やはり、一種異様の感を抱かせられる。御念仏の御馳走を離れから一つ一つ望遠鏡で克明に記しながら、「物好き」からだと主人公は弁明するが、しかし妙に固執する姿がある。「海揚り」(昭45・12)も同様である。一昨年、神戸の瓶井米山人という人から、海揚り古備前を買う仲間に誘われる。勧誘は昨年と今年とあわせて三回にわたる。誘う瓶井米山人の執念も面白いが、より強く心引かされるのはその話にのるのらぬは別として、「海揚り古備前」、別名「汐くぐり古備前」について、誘いのくる度に徹底的に調べてゆく主人公の姿である。「海揚り」のある可能性について、それが個人に取得できるかどうかの権利のあり方について、さらには、古備前の研究家桂又三郎、骨董に精しかった平田八春、そして、かつて本格的に海揚り古備前の収集にのりだした岡山の陶守産科院長などについて調

べあげる。随筆でみた「しづくし」的なもので、「海揚り古備前づくし」とでも言おうか。ここに描き出される平田八春、桂又三郎、陶守院長、瓶井米山人、そして何より主人公自身、なべて、固執の人と言ってよい。

少しくどくなった、取りまとめるなら、創作に見る最近の井伏の仕事は、体制または権力に対する個の位置や個の存在する意味の測定を行おうとしていると言ってよかろう。つまり、時に抵抗の姿勢でもって、時に何かに激しく固執することでもって、自己の立場を措定しようとしている人達にきわだった関心をよせているということである。ここに井伏の一つの創作モチーフがある。井伏の眼は体制よりもその個の描出に重点がある。

そして、随筆群をその眼で見直すと、固執の人々への配意が、ここでも執拗に行われていることに改めて気づかされる。とり急ぎ挙げてみる。「伊沢蘭軒」執筆中の鷗外に批正の文を送り続けた漢学者杉東福田禄太郎（「鷗外の手紙」昭42・1）、釣に行きながら鷗外の作品のことばかり話す文学の鬼宇野浩二（「宇野さんの魚釣」昭43・11）、筋を通そうとして各所で衝突して潰えていった徴用員平野直美（「戦争中の徴員・平野直美」昭45・2）、「雨月物語」に遷かれ、秋成の研究に一生を注いだ佐藤古夢（「『雨月物語』明治翻刻本」昭48・9）、現在ロンドン在住の某老日本人の古い手帳に見る苦難の記録（「九月十二日記」昭48・10）、奥さんの料理したものか、または自分で調えたものしか箸をつけず約束すると昭和十一年から戦後まで毎月きっちり九十円、太宰治に送り続けた、治の長兄津島文治（「太宰治と文治さん」昭48・11）、三好達治の年譜作りに取り付かれた石原八束（「年譜に遷かれてゐた人」昭48・11）、ひたすら備前焼を追い続けた桂又三郎（「桂又三郎」昭50・10）、真正直に、つねに「本格的」に生きた画家硲伊之助（「硲三彩亭」昭50・12）などなど。律気で、正直で、小まわりがきかず、いつも「ひた向き」（「桂又三郎」）に生きた人々を、井伏は追い続けているようである。

「硲さんの描いた挿絵にはたいていの小説家が満足したやうだが、中里介山だけはひどく怒つたことがあるさうだ。『大菩薩峠』の挿絵のとき、登場人物の机龍之助か誰かが靈魂をしてゐるところを描いた。丁髷を結つた人物でなくて、オールバックの青年が寢てゐるところを描いた。絵としてはうまく出來てゐたが、中里介山は憤然として、もう原稿を書くのは止したと新聞社へ云つたといふ。私が硲さんに會つたとき、『なぜオールバックの男にしたんです』と訊くと、オールバックの若い友人にモデルになつてもらつたから、さうなつてしまつたと云つた。當然のことのやうに云つた。」（「硲三彩亭」）

両者の間に立っておろおろする編集者の姿が思いやられ、思わず微苦笑させられるが、ともかく、井伏はこういう「律気さ」をこよなく愛したようである。まさしく、井伏自身がそうであるからである。軽薄な才子位、井伏が嫌うものはない。

私は、井伏の手法の一つに、ずらしの手法とでもいうものを考えている。いたと言ってもよい。例えば、昭和三十二年一月の『文学界』は「文芸誌の理想像」という特集を編んだ。三島由紀夫、伊藤整、平林たい子、椎名麟三、井上友一郎などの各氏がかなりまじめに理想像を描こうとした。ところが井伏は、「とてもこの課題に向くやうな原稿は書けないと氣がついたので、約束を破つて編輯記者に關する思ひ出を書いて埋草用の原稿に當てる。」と述べ、澁田樗陰をはじめ、二、三の雑誌記者のゴシップを記し、あげく、「この斷片的な話は、記者気質にもいろいろ纒異のあることを物語つてゐるかと思ふ。但し、課題とは何の關係もない。」と結ぶ。「理想像」といった観念操作の空しさ、理想ということばに操られ自己を見失う愚しさを井伏は十全に承知し、ひどく嫌っているのである。それは自らが行為の中心人物となり、理想像となることの忌避でもある。概念、観念にしても同じで、いよいよというとき、すらりと避けたり、時には逃げていることが多い。

「『作品』を出していたのは、昭和四、五年頃から六、七年頃の間ではなかったかと思う。そのころの中島君は酔っても酔わなくても談論風發で、見るからにきびきびした感じの少壮評論家であった。あるとき私は『作品』の會の歸りに中島君と梯子酒をして、十二社の近くの中島君のうちに泊った。翌朝、お母さんにお目にかかったが、氣品のある質に立派な婦人であった。中島君が例によって談論風發、べらべら喋り出すと、お母さんが『健藏が何を申しますやら』とやわらかにたしなめた。その一言で健藏はしゅんとしてしまった。しばらくすると健藏がまたべらべら喋りだす。お母さんが『健藏はあのようなことを申します』と云った。健藏はしゅんとなった。」（「風貌・姿勢」昭44・4）（傍点これのみ井伏）

中島健藏の談論はかくて見事に戯画化されてしまう。いかにも鮮かな概念こわしである。しかし、先の「文芸誌の理想像」と同じで、それではその談論の中味は、理想の内実はと言うと、それ自体が、場合によっては一方的に破棄されてしまう。いずれかへ傾斜しない精神のバランスとしては見事であるが、場合によっ

ては、それはきわめて退嬰的なものになりかねない。そこに一つの問題がある。例えば、こういうずらしである。

「井伏　十二時に玉音放送がありましたね。

五木　私たちは、あのとき平壌一中の校庭に整列して、玉音放送を聞いたわけです。

井伏　そうですか。僕は広島県の田舎に疎開していまして、廊下に腰かけて聞いていました。

五木　あれは、重大な放送があるから、みんな集まるようにという校内放送で…

井伏　私の所は隣組から刷物がきました。」（「戦後と漂流」〈対談井伏鱒二・五木寛之〉昭44・11『文芸』）

見事に二人の作家の個性、資質が現われている。五木が感情の激化をはかろうとするのに対して、井伏は見事にずらしている。五木はやりにくかったろうと苦笑させられる。

故郷の近くの山村、過疎化現象で、四年前に後三年したら学童が十五人になるだろうと予想されていた小学校が、去年一人きりになる。そのあと、井伏は、「今はどうなっているか、校長さんに會っていないのでわからない。」と記して結ぶ（「川底の町」）。「校長さん」をここで出す必要は別にない。この状景で、もっと場の深刻化や疎外状況の悪を訴えることができるのである。「校長さん」で、眼がちょっと逸らされる。窓の外の自動車の騒音に悩まされている、事故も絶え間がない。戦後二十年間に車の衝突する音を五十回以上も聞いた。「そのつど、どこからともなく巡査がやって來て、地面にチョークで白線を描いたり巻尺で寸法を計ったりして、警察手帳に何か筆記した。」（「窓の外の自動車」）。「どこからともなく」、「何か」は言いえて妙である。しかし、その「妙」のところで、いつか焦点がぼけてくる。御坂峠の茶屋は荒れはて、太宰治の碑も落書で徹底的に傷つけられていた。茶屋が店をやっていた頃は大切にされていたし、建碑の時は河口村の人達の手厚い協力があってできた碑だ。「『見ろ、ひどい落書だ。何百人もの手で荒らされてゐる』／私は急な坂道をのぼったので、息をきらしながら碑の臺石に腰をかけた。／『こんなにいっぱいに落書して、小枚染のやうぢやないか。しかし、染模様だとしたら、何模様に似てゐるだらう』」（「峠の茶店」昭47・2）。怒りの視点がふとずらされるのである。井伏はユーモアについて、「僕はもともとセンチメンタルな人間なんですよ。それを消すためなんだ。」、あるいは直情について「島崎藤村のような、あれが恥ずかしい」（「現代文学とことば・2、井伏鱒二」）と言っている。それ故に焦点をずらすのである。このずらしの手法がこれまで井伏の文体を支えてきたものであろう。徹底追求や問題顕現化の直前で、ふっと事をかわすのである。そこに、井伏の大きさと恐さがあった。事を単純化しない認識の漸添があった。井伏の捕えどころのない魁偉の一因はそこにあった。ところが、固執の人を追い、生涯の総括期に入ったごく最近の井伏には、このずらしの手法が少し消えかけている。例えば、徴用時代の友人松本直治が、原子力発電所に勤務中、放射能をあびて舌ガンにかかり死んだ息子を悲しみ、放射能許容量について執拗に調査していることを知り、その発表の労をとる（「無常の風」昭53・11）姿勢はひどく厳しいし、亡き友人木山捷平を想う文章は限りなくやさしい（「木山捷平の詩と日記」昭56・1）。むしろずらしをやめ、井伏自身、固執の人へと転化しかけている。それが、同じ話の繰り返しとなって現われたりもしている。がしかし、『新倉掘貫』第二篇「徴用中のこと」の後篇、「豊多摩郡井荻村」の完了といった大作を完成してゆく過程で、この怪魚が、妙にゆったりと動き始めてゆくのではないかという気配がするのである。志の定まった井伏を見る気配を私は感ずるのだ。今、井伏はすざまじい転生をとげているようでもある。井伏鱒二、現在、八十三歳である。（昭五六・九・八稿）

（注、この稿を投じてすでに一年を超えた。その間、井伏の仕事が幾つか終り始まった。それを整合すべきであったが、機を得ぬまま校正を迎えた。当時のままにしておく。昭五七・十一・十記）